

第四条 序破急の事

底本・高知本 対校本・鴻山本・演博本

【翻刻】

第四 序破急の事

序といふハ大抵静に有へき也。破ハ則字のことくやぶるへきかたなり。急と云も字のことくいそぎつめる事なり。序ハ緒也と註してたとへハ糸まきに有糸の口の様な事也。其糸のくちをよく見て①(よく)引出せは奥までよく見わけられみたる、事なし。そのことく此序の曲も静にうきやかにして早くもなくまた静にもなきやうに吟する物也。しかれとも序吟の時ハ表ハ静に裏ハ早キ様二をのつから聞ゆるものなり。此曲大事なり。能うたひ得かたし。破ハ拍子の常なるをまもらすして②(やふりすて程を請又程を破り拍子にかゝりていそぎつむるか又程にかゝりてやぶる文字を待か、いつれにても一方破るを云なり。是また音曲者の一大事なり。此心持をしらすしてはうたふ事はやす事成かたかるへし。またいかにほとよくとも拍子よくとも一拍子にハいたさぬものなり。下手のわざなり。程拍子をよくく聞仰、その拍子其程にやぶりつめ、すてつめたるを破の曲といふなり。さて程と拍子とは大やう似てにぬ事なり。よくく心を付てうたひ見るときハ程と拍子ばかり有へし。同じ事なりと云人あり、いかゞあるべし。されとも達者タチヤの)上にてハ尤さも有へし。惣してかよふの所③習てならハれす。またをしへてそのいと

まあらず。よくならひたる人たりといふとも、場数をふまぬ人ハ、心覚斗にてならハさる人の事にあひ付たるにハ勿論、をとりて見ゆ。常に口きゝたりとも、はれわざの時、笑止なるへし。諷にかきらす諸芸に有之。此故に世話にも習はんよりなれよ、稽古に有神変と云。名言なる哉。

急といふハ、たとへハうたひハをそくとも、急につめひらき曲する事。是非ともいそくにあらず。心を付て見へし。心にはかり急を可持。口伝有。

右序破急の事強て謡に不限万事に有之。日用の間に多し。又序に序破急有。破に序破急有。急に序破急有。かんかへみるへし。

【校異】

①高ナシ。演・鴻より補う。

②高ナシ。演・鴻より補う。

③習てー習ひて（鴻・演）

【現代語訳】

第四 序破急のこと

序というのは大方、ゆったりと落ち着いたものでなくてはならない。破はまさしく文字の通りに、それまでの状態を破つて新しくしなくてはならないことをいう。急というのも、文字の通りに急いで、ゆるみなく続ける事である。

序は緒とも説明され、例えば糸巻きに巻かれている糸玉の糸の端、端緒のようなものである。その糸口がどこにあるのかをよく見極めてうまく引き出せば、先までもつれることなく引き出せる。その如くに、この序の曲調（曲）も穏やかに長閑で麗らかにして、速度も速くもなくまた遅すぎないように謡うものである。しかしながら序を謡う時は、表面は穏やかだけれども、見えない裏側では速度が速いように自然と聞こえるものである。このテンポ感が大事である。上手に謡うようになるのは困難である。

破は拍子の基本の間、常間を守らないで捨てる。程とは表拍である拍に対する裏拍（拍と拍の間）をいうが、程を請けて拍子にかかるか、程を破って拍子にかかるかのどちらかをいうのである。「解説参照」これは音曲に携わる者にとっての非常に大事な事柄である。このことがわかっていなければ、謡うことも囃すこともうまくできないはずである。どんなに程と拍子の間がよくても、拍子がよくても、いつでも一本調子の拍子にはしないものである。それは劣った人の行いである。程と拍子というものを完全に聞きとり、その拍子をずらしたり、程を破ったりするのを破の曲調というのである。

さて拍と程とは、おおかたよく似ているが、異なるものである。よくよく気をつけて謡ってみると、程と拍子とは必ず相違がある。同じ事であると言う人もあるが、どうなのだろうか。たしかに上手を極めた人ならばそんな風に言うのは充分ありえるだろう。概してこういう微妙な所は教えられても習うことができるものではないし、また仮に教えるとしても十分な時間はない。良く理解した人であっても、実践を数多く経験しない人は、頭で理解しているだけなので、習わない人であっても実地での経験が豊富で知識が身体化している人には、当然のことながら劣っていると思う。いつも偉そうに論じていても、晴れの舞台での謡の時には、恥ずかしい事になる。謡に限らず諸芸にもこういうことはある。ことわざにも「習うより慣れよ」「稽古に神変あり」と言う。名言である。

急というのは、たとえば謡のテンポは遅くても、急の心で緩急を付けて演奏することである。必ずしも急ぐのではない。心で見なくてはならない。心の内にだけは急を抱くのである。言葉にしがたいのでこのことについては口

伝に譲る。

以上の序破急のことはあえて謡に限ったことではない。万事に序破急はある。日常の事柄にも多い。また序のなにかにもさらに細分化された序破急があり、破に序破急があり、急には急の序破急がある。よく考えなくてはならない。

【語釈】

○一拍子：「一拍子」という特殊演奏法がある。打切の時に大小の打ち返しを省略することを指す。しかしここでは、単に一本調子であるとの意味に解した。

【解説】

・序破急の語について

序破急とはもともとは雅楽の舞楽の構成法である。一曲を序破急の三部分に分ち、終曲に向けて徐々にテンポが速くなる様をいうものである。能楽だけでなく、近世邦楽をはじめ、ほとんどの日本音楽のジャンルに浸透し、テンポや曲の構成法としてだけでなく、音楽哲学にまで拡大した。世阿弥はその伝書の中で、能番組の構成や、脚本の則るべき構成などにも序破急があったとした。うたひ鏡での序破急は、テンポ感を基調としつつ、演奏の技法や心構えとしての演奏哲学とも言えるような広がりを見せている。

・程拍子とは

「程」とはもともととは雅楽における「小拍子（＝一小節）内のリズム的最小単位」（平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭編『日本音楽大事典』、平凡社、一九八九年、一〇六頁）として拍を示す用語である。『うたひ鏡』での程拍子とは、図のように一拍目と二拍目の間のように表拍の間の裏拍のことである。表拍に当てずに、裏拍に謡い出しをずらすことで、リズムの面白さを表現することができる。現在でも「図」に示したように流派によって程から謡い出す慣例がある。

「図」程と拍の関係

	1	2	3	4
①原型	つ	き	しろく	く
②		つき	しろく	く
③			つきしろく	く
④				つきしろく

①が1拍にあてて謡い出す原型とするならば、②は1拍と2拍の間の程（裏拍）から謡い出す（金春・金剛流ではこのように謡い出す）。③は、程から謡い出すとともにその音をモチとして伸ばし、2文字目の「き」も裏拍で謡う（観世流の間）。④は程から謡い出さずに、次の拍（表拍）から謡い出し、その後の文字を「急ぎ詰むる」（運用としてこのように謡う場合もある）。推進するリズムの流れのなかで、程の謡い出しによってパターンを変化させ、効果を生む方法である。

・他の伝書の類似の記事

謡伝書『謡曲拾穂鈔』、『音曲玉淵集』に序破急についての近似した内容がみられる。とくに「場数ふまざる者」や「稽古に神変あり」といった記述を含む『謡曲拾穂鈔』と重なる部分が多い。また『うたひ鏡』の後に編まれた『音曲玉淵集』には、『うたひ鏡』での最後の二文「右序破急の事強て謡に不限万事に有之。日用の間に多し。」に似るとともに、それを発展させ、具体的に曲例を挙げる「惣じて序破急は諸事に渉るべし。仮令ば、芭蕉に『はな以上真あふこと以上行やすきなる以上草』、かやうの所にも序破急あり。」といった記述がある。この部分は『謡曲拾穂鈔』にはない。このように記事の改変過程が推測できるかのような変更が謡伝書の編集のたびに加えられている。

（丹羽 幸江）